



「つながる」

沖縄県高等学校障害児学校教職員組合 伊敷 由香

沖縄県の子どもの貧困率は29.9%と全国の13.9%を大きく上まわっている。この現状を踏まえ、私たち教師に何ができるのか。私は現任校において教育相談、中途退学対策を担当した。当初は、高校に入学したからには卒業を目指そう。それが私の責務だと気持ちを奮い立たせていた。入学後から関わりのあるAは、体調不良をきっかけに相談を受けた。Aの家庭は貧しく、父母は無職、下の兄弟も多いため、アルバイトをしているAが家計を支えている状況だった。そんなAに私は「高校を卒業して早く自立しよう。そのために、学校での居場所づくり、定期的な面談を行う」と約束した。なんとか三年生まで進級したAがある日、「先生、苦しいよ」夜も眠れず食事も摂れない、いつも不安でしかたがない」と訴えてきた。この時、私はどんなに周りが声をかけ、励ましても環境そのものが改善されなければ、いつしか限界が来るのだということを思い知らされた。その後、Aとともに環境を改善する方法をさがした。別室登校、通学のためのバス代の確保。私とAは支援してくれる外部機関を探し援助を受け、そのおかげでA

は、無事卒業することができた。私はAとの関わりの中で、子どもの貧困問題の本質を見ることができた。生まれながらに貧困である子はいない。親世帯の貧困に子どもが巻き込まれているのが現状だと痛感した。そしてAは高校卒業後、多くの支援者の協力を得て就職することができた。またAの訴えのおかげで、下の兄弟たちも様々な支援を受けることができ、さらに、保護者もどうしていいのかわからず不安だったことを知った。Aにとっての自立とは、家族を含めた自立だったのだ。沖縄県の子どもの貧困対策について、行政をはじめ多くの団体の支援の輪は広がっている。しかし私は、そこまでつながらずに困っている人が多いことが重要な課題ではないかと思う。家族に一人でも「苦しいから助けて」が言える人がいれば、貧困の連鎖は断ち切ることができる。私は教師として子どもたちとの向き合い方を改めた。これからは、子どもたちが「苦しい」と言える環境を作ろう。私たち大人が、社会とつながる方法を教えれば、子どもたちがこころの貧困になることは決してない。